

# 独裁者は世界文学の夢を見るか

## ——エヴゲーニー・チジョフ『下訳からの翻訳』と ポストソヴィエト的翻訳ポリティクス<sup>1)</sup>

秋草俊一郎

### I

その著書『生まれつき翻訳——世界文学時代の現代小説』において、レベッカ・ウォルコウィッツは、「最も国際的なジャンルであり」、「翻訳を要請するだけでなく、翻訳を本質的な諸手段で内部に組み入れている」現代の長編小説の一部を「生まれつき翻訳」された作品と定義し<sup>2)</sup>、その誕生や翻訳、流通のさまを活写している。具体的にとりあげられる作品は、J・M・クッツェー、カズオ・イシグロ、ジャメイカ・キンケイド、モーシン・ハミッドのような、多文化的、多言語的なバックグラウンドをもつ英語作家だ。こうした作家の作品が——本書でたびたび名前があげられる村上春樹とともに——現代の国際的なブックマーケットを彩ってきたことは疑う余地がない。

しかし反面、ウォルコウィッツが、長編小説というジャンルを特権視し、基本的に英語で書かれた／に訳された作品を中心に論じていることからわかるように、その議論はグローバルな出版資本主義をあまりに前提としすぎてはいないだろうか。翻訳研究者のローレンス・ヴェヌスティは1998年刊行の著書『翻訳のスキャンダル——差異の倫理にむけて』で、以下のように述べている。

翻訳というのはマージナルな文化であって、つまるところその拠って立つ枠組みがナショナルかグローバルか、覇権言語とどういった関係かによって決まってしまう。ここで言う覇権言語とは、国の標準方言と一般に、世界的にいまなおもっとも翻訳されている言語である英語のことである。本書〔『翻訳のスキャンダル』〕の一番の前提こそが、おそらくは翻訳最大のスキャンダルなのだ。非対称、不均衡、支配と依存という関係は、訳すという行為——翻訳する側の文化のために訳文を提出するという行為だが——のありとあらゆる側面についてまわる。翻訳者は、外国のテキストと文化の、制度的な搾取に加担しているのだ。<sup>3)</sup>

ここでヴェヌスティが述べるように、言語間の翻訳においては、翻訳する側／される側の言語の力関係を度外視して論じることはできない。そして翻訳者は、翻訳をつうじてこの文学流通の国際的なシステム・制度の強化に加担しさえもする。そして研究者も特定の翻訳された／翻訳されやすい文学作品を研究し、それを正典化することで、既存の制度の下支えに力を貸してしまいもある。ウォルコウィッツのようなタイプの研究は、一歩間違えれば既存のシステムを

自明視し、追認するだけのものになりかねないだろう。

また、私たちは世界文学的な研究手法の陥穽についてもあらためて考える時期にきているのかもしれない<sup>4)</sup>。ダムロッシュは世界文学とは「正典のテキスト一式ではなく、一つの読みのモード」であるとして<sup>5)</sup>、異なる時間と時代の作品を結びつけてアンソロジーを編んだり、論じたりすることを推奨する。しかし、ヴェヌティが指摘したような構造を前提にするならば、ここでも翻訳すること、(脈絡なく)時代や場所を問わず作品を選出すること、そしてそれらを論じること、それ自体が一種の権力だという現実と直面せざるをえないのではないか。

翻訳や世界文学的想像力が、ときに恣意的なものになる、卑近な例をひとつあげておこう。2011年に七月堂から刊行された『エミリー・ディキンソン詩集』は、日本で数多く出版されたディキンソン詩集の中でももっとも奇抜なものと思われる。アメリカ文学者の千葉剛の編によるものだが、千葉によるディキンソンの詩の邦訳が、「現代日本で最も輝いている女性ジャーナリスト」である櫻井よしこの詩と対置されているのだ。千葉の弁によれば、それによって読者は「人間として変わらない「感性」は、何時どんな時でも存在しているという事を2人の文を通じて知ること」ができるだけでなく、「そしてその「感性」を言語化した見事な「表現力」を体感すること」もできるのだという<sup>6)</sup>。そして巻末には、そのそれぞれの詩に対して千葉による解説が「同じ神さまをテーマにしたものでありながら、二人の生まれ育った環境の違いが文章の中によく表れています」、「このようにエミリーもよしこも日光から受けた心からの感動を共有しているのは大変興味深い」などと書き添えられているのである<sup>7)</sup>。

千葉はディキンソンの専門的研究者として、学術論文を数多く執筆する人間だが、いかな根拠をもって櫻井よしこの詩をディキンソンに比べうるものと見なしたのかは、解説を読んでもはっきりしない。言えることはただ、研究者としての権威をもってアメリカの正典詩人であるエミリー・ディキンソンの詩を訳し、日本のジャーナリストの詩と同列においたということだけである。そして版元の七月堂も詩の専門的出版社として名高い。

上記の例は極端だが、ある意味世界文学的な、作品の時代・場所を超えた組み合わせが、恣意的な読みを誘発すれば有害なことさえあるだろう。また、基本的に世界文学論者は「価値があるものが訳出される」というある意味素朴な資本主義における商業翻訳的通念に則っているようなのだが、そのような観点からでは取り逃してしまう翻訳実践もあるのではないか（これはもちろん自戒でもある）。

上述のような問題意識から、本稿では、現代ロシアの作家、エヴゲーニー・チジョフの長編小説『下訳からの翻訳』Перевод с подстрочника (2013)を紹介する。その際、この作品が背景にしている旧ソ連地域特有の事情や、作品がモデルとした現実の翻訳にかかわる事件などにも触れながら、これまでの世界文学研究があまり触れてこなかった、非対称な条件における翻訳について取り上げ、考察してみたい。

## II

作品の前に、作者であるエヴゲーニー・チジョフをかんたんに紹介しておく。というのも、この作家は日本はおろか、英語圏ふくめたほかの言語に訳された機会がほとんどないと思われ

るためだ。エヴゲーニー・リヴォヴィチ・チジョフは1966年モスクワ生まれの作家、ジャーナリスト、翻訳家で、1997年に中編『終わりのない祝日』でデビュー、2000年に初の長編『未来の人間の暗い過去』を刊行。以来、全部で四作の長編を発表している。『下訳からの翻訳』は著者3冊目の長編で、「ヤースナヤ・ポリャーナ」賞と「ポリシャヤ・クニーガ」賞の最終候補に選ばれた。インタビューによると、ユダヤ系でもあるようだ<sup>8)</sup>。現在、モスクワ郊外のゼレノグラードに妻と犬、猫といっしょに住んでいる<sup>9)</sup>。

小説のあらすじは以下のようなものになる。中心人物であるモスクワ在住の詩人・翻訳家オレーグ・ペチギンは、旧友であるチムール・カシモフに中央アジアの国家コシュトゥールバスタンに招かれ、大統領であるラフマトクル・グリモフの詩のロシア語への翻訳を依頼される。カシモフは独裁国家コシュトゥールバスタンでは要職に就いており、ペチギンは大統領の翻訳者として破格の待遇でむかえられる。

まず、小説のタイトルについて触れておきたい。Перевод с подстрочника の前半の「ベレヴォート」は翻訳という意味だが、後半の「パストローチニク」とは、原文から逐語的に翻訳した訳文を指している。これは場合によっては原文も参照できるようなかたちのもので、под（～の下に）と стро́к（行）という言葉の組み合わせになっていることからそれが知れるだろう（英語では crib と呼ばれるものである）。コシュトゥールバスタンは架空の国家であり、話されているコシュトゥール語も架空の言語だが（「コシュトゥール」とはロシア語で木の葉などがカサコソなる音の意味）、主人公のロシア人ペチギンはコシュトゥール語を解することができず、先方が用意した下訳をつかってロシア語訳することになる。

このような方式の翻訳は日本人には奇異にも映るが、旧ソ連ではとりたてて珍しいわけではなかった。背景にはソ連特有の事情と、翻訳の果たした役割の大きさがある。10月革命を経て成立したソヴィエト連邦は、（少なくとも表向きは）反帝国主義・植民地解放を国是をした社会主義国家だった。連邦内の共和国でそれぞれの現地語教育が許容されたこともあり、政策によって各共和国現地語間での翻訳が奨励された<sup>10)</sup>。ソ連では社会主義イデオロギーを伝播し、民族の友好を演出する道具として翻訳が重要視されたのだ。その結果、諸民族の文学を結集した「世界文学」がつくられもした。

共和国内での翻訳、とりわけ共和国の「マイナー」言語からロシア語への翻訳の場合、現地語の話者がまずロシア語に逐語的に訳し、それを下訳にしてロシアの文学者がより文学的に「洗練」された訳にしあげるといった翻訳手法がとられることは珍しくなかった。その際、典型的だったのは現地語の詩人なり作家本人なりが逐語訳の下訳を提供するという手法で、場合によっては訳者であるロシアの文学者とコンタクトをとりながら最終的な訳文を作成する。つまりソヴィエトにあっては共和国現地語からロシア語への翻訳は、自己翻訳と重訳を組み合わせた方式が採用されるケースも多かったのだ。このような逐語訳に頼った共和国現地語からの文芸翻訳は、ソ連期のまさに終わりまで残存していた。

しかしここには非対称性があり、各民族語からロシア語への<sup>パストローチニク</sup>下訳を用いた翻訳は盛んにおこなわれた一方で、ロシア語から各民族語への同じ手法による翻訳はおこなわれなかった。背景にはソ連では表向き民族の友好・平等がうたわれていたが、ロシア語・文化の卓越性が暗黙の前提になっており、そのためロシア語はソ連領内で事実上の共通語となっていたのに対し（つ

まり、各民族語の訳者は下訳がなくても直接ロシア語から翻訳することができた)、各民族語を解するロシア人は少なかったという事情があった。またソ連では1934年の第1回ソヴィエト作家大会で社会主義リアリズムが唯一の芸術様式と定められたため、翻訳のプロセスにおいても、各民族語の詩をロシア側の「進んだ」、政治的に「正しい」価値観に従わせるといったことも往々にしておこなわれた(もちろん作家・作品選定の段階においてもイデオロギー的選別があっただろうことは想像に難くない)。つまり翻訳の環境から、その実際のストラテジーにいたるまで、(翻訳研究者ヴェスティの用語で言うところの)きわめて「同化」的な翻訳が横行していたということになる。ただしロシア側の文学者が一方的な搾取者かと言えばそれも難しく、苛烈な思想統制のもと、作品の発表が難しくなった詩人や作家が、翻訳で糊口をしのぐといったケースも多々あったことは触れておかねばならないだろう<sup>11)</sup>。

比較文学者ハーシャ・ラムは、詩人ボリス・パステルナークによる、1930年代から50年代にかけての詩人ティツィアン・タビゼのジョージア(グルジア)語作品のロシア語訳を検討し、以下のように述べている。

十九世紀帝国主義と二十世紀共産主義をまたにかけたロシアージョージア間の関係は、メアリー・ルイズ・ブラットが「コンタクト・ゾーン」と呼んだ、「文化同士が——しばしばきわめて非対称的な力関係のもとで——出会い、ぶつかり、取っ組み合う」社会空間の、ユニークな例である。<sup>12)</sup>

社会言語学者のメアリー・ルイズ・ブラットは、不均衡な力関係における異言語間同士の接触の場を「コンタクト・ゾーン」と呼んだが(植民地がその典型)、チジョフによる小説の『下訳からの翻訳』という題名もまた、そのようなコロニアルな関係性のもとにある営為をあらわしているものとひとまずは言うことができる。

### III

コシュトゥールバスタンでは、時の為政者である国家元首グリモフの銅像があちこちに建てられ、その権威を誇示している。他方でグリモフは詩人でもあり、その詩の文言が建築物のあちこちに刻みこまれている。グリモフの詩は国家建設の計画のもとになっていると主張されるほど国内では重視され、カシモフは「今日のコシュトゥールバスタンでは詩が権力の座についている!」とさえ言う<sup>13)</sup>。元首としての権力を背景に、そのことばは聖典のように神聖視されているわけだ。グリモフが治めるコシュトゥールバstanは先述したように架空の国ではあるが、国と国家元首、その詩の翻訳にまつわる事件にはモデルが存在する。

2004年12月、3名のロシア詩人たちが、トルクメニスタンの大統領サパルムラト・ニヤゾフ(1940-2006)にその詩をロシア語訳して、トルクメニスタンの詩のロシア語アンソロジーにおさめたいという手紙を出したことが報道され、論議を呼んだ。

スキャンダルの一因は、トルクメニスタンと詩の著者である大統領ニヤゾフにある。トルクメン・ソヴィエト社会主義共和国の最高会議議長だったニヤゾフは、ソヴィエト崩壊後の1991

年に独立したトルクメニスタンにおける選挙で圧倒的な支持をえて初代大統領に就任し、以降独裁政権をきづいた。1993年からは「トルクメン人の長」を意味する「テュルクメンバシュ」を自称し、個人崇拜の傾向を強めた。石油や天然ガスの豊富な資源を背景にして、ニヤゾフはさまざまな独自政策を打ち出したが、言論の自由をはじめ種々の人権は制限されていた。

ニヤゾフは、元社会主義国家の指導者らしく、<sup>グラフォマニア</sup>書字狂でもあったようで、詩集や回想記も執筆したが、なかでも有名なものが2001年に刊行された『ルーフナーマ』（アラビア語とペルシャ語の組み合わせで「魂の書」という意味）という思想書である。これはトルクメニスタンの神話や民話を切り張りして編まれたもので、トルクメン民族の偉大さを称揚する内容になっている。本書は「新たに独立した中立国トルクメニスタンの国づくりの指針をしめすもの」とされた<sup>14)</sup>。

実際の内容はどのようなものか。世界各国の独裁者たちの書籍を読んだ作家のダニエル・カルダーは、『ルーフナーマ』を以下のように評している。

『ルーフナーマ』は、はち切れんばかりの覇気に満ちた作品だ。おそらく独裁者文学のなかでも最大の野心作だろう。[中略] すべてにおいて、ニヤゾフはトルクメン人のためのイデオロギーのみならず、新しい歴史と神話を作り上げるべく奮闘した。トルクメン人の各部族や、宗教と歴史に対する子供たちの考えについて長々と論じ、そこに他に類を見ない自己愛をプラスすることで、ロシア人の奴隷と化し、ソ連によって文化を奪われた砂漠の民の尊厳を取り戻そうとした。偉大な著述家が書けば不朽の名作となる内容なのだが、ニヤゾフは著述家としては並以下どころか最低最悪の部類だった。『ルーフナーマ』と共に天界を目指したニヤゾフだったが、結局は地上界で朽ち果ててしまった。<sup>15)</sup>

トルクメニスタン国内では『ルーフナーマ』は『クルアーン』に匹敵する聖典とされ、国民は内容に通暁することを求められた。公教育で必修科目として教えられ、最終的には自動車免許の試験にも出題された。本書を手にしたニヤゾフの銅像が各所に建造されただけでなく、首都アシガバートには『ルーフナーマ』をそのまま巨大にした本のかたちのモニュメントが建設され、音楽が鳴って光ったり、日によってちがった頁が開かれるなどのしかけがほどこされた。

本書が流通したのはトルクメニスタン内に留まらなかった。本書は英語やトルコ語をはじめ世界50か国語に翻訳され、各国語版の発行部数は合計で100万部を突破した。なお本書には日本語の翻訳もあったようである。佐々木良昭・宍野史生訳でトルクメニスタン政府公式サイトにほかの翻訳とともに掲載されていたようだが、現在削除されてしまっている<sup>16)</sup>。

しかしなぜ、国家元首の著した書物とはいえ、「最低最悪」の本が50か国語にも翻訳されたのか。この内幕に光をあてたのが、2007年のフィンランド制作のドキュメンタリー映画、『聖なる本の影』である。本ドキュメンタリーによれば、実は各国語版の翻訳は、シーメンス、ダイムラー・クライスラー、キャタピラー、ジョン・ディア、ブイグといった多国籍巨大企業が出資していた。代わりに企業はトルクメニスタンの天然ガスや石油の利権を得るという仕組みがあった<sup>17)</sup>。

映画では首都に招かれ、国家元首に丁重に歓待される翻訳者たちの姿が映しだされている。

つまり、翻訳される側にとって、(どのような経緯であれ) 世界各国語に翻訳され、出版されたという事実が重要なのだ。プロパガンダとして、国内外にその権威、政権の正統性を発信できるからである。翻訳はグローバル資本と結託して、独裁政権のプロパガンダに手を貸していたのだ。

なお、これだけ「翻訳」された本である『ルーフナーマ』だが、実はもともと何語で書かれたかははっきりしていない(ニヤゾフ自身のトルクメン語能力を疑問視する説もある)。研究者のダン・シャピラは以下のように述べている。

この『ルーフナーマ』が書かれたもとの言語が何であったかは、正確にはわからない。候補は二つしかない。トルクメン語とロシア語である。原文の修正段階を反映したさまざまな翻訳があるので、『ルーフナーマ』のテキストが何度も更新されたのかのような印象を受けることもある。<sup>18)</sup>

50 ある各国語版も、かならずしも「原典」からの翻訳というわけではなく、たとえば英語版はトルコ語版からの翻訳なのだという。

ウォルコウィッツは現代において「生まれつき翻訳」された作品こそが、広く流通する可能性を秘めた世界文学なのだとした。であるならば、執筆原語すらはっきりとわからず、そもそもの刊行時から翻訳を内包し、翻訳を運命づけられた『ルーフナーマ』も一種の「生まれつき翻訳」された作品と言うこともできるだろう。またダムロッシュは、「世界文学とは、翻訳で価値を増す」ものだと定義した<sup>19)</sup>。ニヤゾフの『ルーフナーマ』は世界各国語に「翻訳」され、そのことで実際に「価値」を増している。では『ルーフナーマ』が世界文学かと問われれば、同意するものは少ないだろう。『ルーフナーマ』のような本を前にすると、そもそものがこうした世界文学をめぐる議論自体が、西洋的な出版の慣習や、国際的な著作権条約、商業的な翻訳制度を前提にしたものだと感じかされる。そしてときに「価値がある作品が翻訳される」というシステムはハックされて、独裁政権の威信を高めるために使われもする。

2004年のロシアにおけるスキャンダルでも、ニヤゾフの詩の翻訳を志願した詩人たちは、報道によれば、トルクメニスタンの天然ガスの採掘権を狙うロシアの世界最大の天然ガス企業であるガスプロムから報酬を受けとる予定になっていた。そういった意味では本「スキャンダル」もありふれた話だったわけだが、2004年の翻訳未遂事件が大きく報道されたのは、翻訳を希望した詩人の中にエヴゲーニー・レイン(1935-)のような著名な詩人がふくまれていたことだった<sup>20)</sup>。レインは、詩人ヨシフ・ブロツキーと同じ、詩人アンナ・アフマートヴァの弟子のグループ「アフマートヴァの遺児たち」のひとりとしてレニングラードで活動し、プーシキン賞ほかいくつもの国内の文学賞を受けていた。レインのような著名な詩人がロシア語訳したということになれば、テュルクメンバシュの威光もますます強まろうというものだ。

結局、独裁者の本の翻訳は差別や自由への圧力に反対する国際ペンクラブの憲章に反しているとして(その主張によればトルクメニスタンには300名の作家・詩人がいるにもかかわらず、年5冊しか書籍が刊行されていないという)、ロシア・ペンセンターから除名を勧告され、レインふくむ詩人たちは翻訳の計画を取り下げざるをえなかった<sup>21)</sup>。

話を小説『下訳からの翻訳』に戻す。小説の中ではグローバル資本については語られないが、主人公のベチギンはコシュトゥールバスタンに招かれると、特別な住居が用意され、セキュリティや食事、身の回りの世話も整っている（手伝いに来ている女性と関係をもってもよいと言われる）。モスクワではベチギンは売れない詩人であり、かつて1冊だけ出した詩集も、120部しか刷られず、それもほとんど売れていない（そもそも詩集とは基本的に売れるようなものではないだろう）。ところがその詩集はベチギンの知らぬ間にコシュトゥール語訳されて15万部が発行され、売店や書店に平積みされる。それだけでなく大統領の翻訳家ということでテレビに出演させられ、大詩人のあつかいをうける。さらに滑稽なことに、訳詩が完成する前から国家的な賞を受賞してしまいさえもする。

しかしその一方で、コシュトゥール語版の著者プロフィールは架空のもの（反政府分子として投獄されていた）に差し替えられてしまう。カスィモフは詩そのものよりも「誰が書いたのか」が重要なのだと言って、ベチギンを宥める。

このような描写は、言うまでもなく風刺的である。しかし風刺は独裁国家だけでなく、ロシア国内にも向けられている。ベチギンはロシア語詩人としてはまったく無名だが、そもそもロシアでは詩は現実的な力を失ったものとして描かれる。コシュトゥールに出発する前のある日、ベチギンは友人の詩人ヴラディク・コーニシンと、ウォッカを飲みながらテレビでチェチェン侵攻の様子を——ロシア軍が武装勢力を無慈悲に壊滅させるさまを——眺めている。コーニシンは詩には戦争を止める力がないといって嘆き、酔って物置にある自分の詩集を燃やしはじめてしまう。そして火に包まれたままなかば自殺のように死ぬ。ある評者はこうした点や、作中で執拗に「舞台がロシアではないこと」が強調されていることを指して、むしろ言及されているのはロシアの現状なのだと述べているが<sup>22)</sup>、そうした解釈も十分に許容できると言えるだろう。本書は、スターリンを批判した詩人オシップ・マンデリシュタムの詩からのエピグラム、「詩は権力である」が冒頭に掲げられているが、描かれているのは言論の自由が封殺された社会では、独裁者の手による詩のみが力を持つという皮肉な状況であると言える。

#### IV

状況をなにも知らないままコシュトゥールバスタンにやってきたベチギンの翻訳の筆は当初遅々として進まない。しかしあるとき、恋人になったコシュトゥール人の女性に詩の原文を音読してもらうことによって、詩の内容がつかめ、翻訳が一気にすすむようになる。これはソ連でかつておこなわれた、訳者と現地語インフォーマントの協同作業を思わせる（ただし、そこには西洋からきた白人男性であるベチギンに、アジアの女性が声で内容を伝えるという一種のオリエンタリズム的クリーシェがあることは否めない）。だが作品について理解が深まることで皮肉にも、詩が大統領のおこなってきた弾圧を暗示していることもわかるようになる。

見聞を広げようと、市街地から出て、現地人との交流を試みるが、些細なことからトラブルになり、殺害されそうになってしまう。街の外に住む人々は、コシュトゥールバスタン政府軍を援助したロシアとロシア人に、かならずしも好意的ではなかったのだ。また彼らとの接触によって、グリモフが自分に逆らうものは容赦なく弾圧し、民間人すら生きたまま焼かせるよう

な残虐な方法で殺していたこともわかってしまう。事情の一端を知り、ペチギンはグリモフの詩を訳すことに良心の呵責を覚えるようになる。翻訳賞の授賞式で思わずグリモフ政権の圧制に言及してしまったペチギンは自分の立場を危うくしてしまう。

訳文を練る筆が進まないペチギンは大統領のグリモフに直接面会して、翻訳の役にたてようとする。しかし、面会の最中に反政府派が大統領を銃撃し、ペチギンも逮捕されてしまう。

ペチギンには銃撃で死んだように思われたのだが、大統領はなぜか無事である。暗殺犯の一味という濡れ衣を着せられたペチギンは牢獄の中で翻訳を完成させ、不死なる神のような大統領に直接手渡すことに一縷の望みをかける。翻訳は完成したものの、ペチギンは銃殺されたことが示唆されて物語は終わる。コロニアルな、ソ連的な「パストローチニク」からの翻訳というプロジェクトに、旧来的な意識のままで乗り出した詩人＝翻訳者は、復讐のように旧植民地の独裁者に存在を抹消されてしまうのだ。かつてのソ連とは異なり、この独裁国家では翻訳者の方が代替可能な存在であって、権力者は自分に都合のいい翻訳者をまた招き入れればいいだけだからだ。

また、2004年の現実の事件と小説との大きなちがいは、トルクメニスタンの独裁者ニヤゾフの「最低最悪」の本とはちがいで、コシュトゥールバスタンの独裁者グリモフの詩はあきらかにすぐれたものとして提示され、描写されている点である（作者のインタビューによれば、この独裁者詩人のモデルはアルチュール・ランボーだという）<sup>23)</sup>。その意味で、グリモフの詩は（独裁者のものであるにもかかわらず）翻訳する価値がたしかにあるのであり、だからこそペチギンもその仕事に取り組んでいるのだ。

しかし小説の中でグリモフの詩がどうなっているのか、断片的にロシア語の「下訳」で提示されることはあっても、原語のコシュトゥール語版そのものについては、ペチギンにも読者にも具体的に知る術はない。途中でグリモフの詩は自分が書いたと主張する老詩人などがあらわれ、詩の本当の作者はだれかペチギンは悩むのだが、そもそも目の前にある「下訳」が誰の手によるもので、原文に忠実なのかは一切考えない。

訳者であるペチギンはコシュトゥールバスタンを訪問し、詩の著者である大統領に会おうとはするのだが、コシュトゥール語を学ぼうとは思わない。またコシュトゥール語そのものもテキストには一切出てこない。その意味では本書で描かれているのは実は一般的な翻訳そのものではなく、たんにロシア語からロシア語への言いかえに過ぎない（パステルナークでもジョージア（グルジア）語を多少は学んだというのに）。ここにはペチギンだけでなく、ロシア語だけで書かれた小説そのものの限界もあるのだろう。

結局、現実の東洋＝他者は下訳というヴェールにつつまれたままになる。ただし作中ではコシュトゥール人やコシュトゥール語、そしてグリモフの理解不可能性は、詩そのものの理解不可能性へと回収されてしまう。

ここにいればいるほど、周囲のことが私にはますますわからなくなってくる。話したように、詩の本質とは不明のものなので、コシュトゥールバスタンで私は詩の真ただ中にいることになる。<sup>24)</sup>

作家紹介でも述べたように、チジョフは現在まで管見のかぎり国外でその作が翻訳された形跡がなく、また本作に限った話でもその「下訳」というモチーフからしても、今後も国際的なマーケットでそれほど受容がすすむとは思われない。そういった意味では『下訳からの翻訳』も現況「世界文学」たりえる作品ではない。しかしこの作品のテーマであるコミュニケーションの断絶は普遍的なものだろう。また翻訳の政治やプロパガンダへの利用は、かつてからあったものではあるが、グローバル化にともなってより拡散力をもっているとも考えられる。描出される翻訳についての諸事情や、作品周辺のさまざまなコンテクストは、ローカルなものでありながら、現在の翻訳研究や比較文学研究の死角を照射するものになっているのではない。

## 注

- 1) 本稿は2021年9月10日におこなわれた「世界文学・語圏横断ネットワーク第14回研究集会」でのパネル「世界文学再考——『生まれつき翻訳』のアクチュアリティ」において発表した原稿に、当日の質疑応答の内容なども踏まえて改稿したものである。ご意見をくださったみなさまに御礼申し上げる。
- 2) レベッカ・ウォルコウィッツ『生まれつき翻訳——世界文学時代の現代小説』佐藤元状・吉田恭子監訳、田尻芳樹・秦邦生訳、松籟社、2021、13
- 3) ローレンス・ヴェヌステイ『翻訳のスクランダル——差異の倫理にむけて』秋草俊一郎・柳田麻里訳、フィルムアート社、2022、16
- 4) 私自身、現在の世界文学研究を紹介する一方、それを批判する内容の文章も発表してきた。2018年に出版した『アメリカのナボコフ——塗りかえられた自画像』（慶應義塾大学出版会）では、自己翻訳が解釈のある面では固定し、原作のコンテクストを埋もれさせるものであるとした。2020年に出版した『「世界文学」はつくられる——1827-2020』（東京大学出版会）では、「世界文学」という概念が歴史的にいかに構築されてきたのかをひもときつつ、それが出版や政治、教育にはたしたイデオロギー的な役割を論じた。
- 5) デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か？』秋草俊一郎・奥彩子・桐山大介・小松真帆・平塚隼介・山辺弦訳、国書刊行会、2011、432
- 6) 千葉剛「まえがき——「感性」と「表現力」」櫻井よしこ・千葉剛編『エミリー・ディキンソン詩集』七月堂、2011、8
- 7) 千葉剛「作品解説」同書、85、89
- 8) “Евгений Чижов — Про меня”. Сноб. <http://snob.ru/profile/26978/>（二〇二一年九月一五日閲覧）
- 9) <http://chizhov.ucoz.ru/>（二〇二二年三月二六日閲覧）
- 10) ソ連内部での翻訳については拙著『「世界文学」はつくられる——1827—2020』第二部第二章でも多少触れたので、そちらも参照してもらいたい。
- 11) 亡命作家ウラジーミル・ナボコフは、やはり亡命詩人のヴラジスラフ・ホダセーヴィチを追悼する文章（1939年発表）で、「しかし、ロシアの境界の内側で、輒（ただ）に屈せず（たとえば、カフカスの三文詩人を翻訳することを拒否するような）、自身より高いところに自由な詩神をおくほど無謀にふるまう詩人を想像しがたい」と述べている。ウラジーミル・ナボコフ「ホダセーヴィチについて」『ナボコフの塊——エッセイ集 1921-1975』秋草俊一郎編訳、作品社、2016、99
- 12) Harsha Ram, “Towards a Cross-Cultural Poetics of the Contact Zone: Romantic, Modernist, and Soviet Intertextualities in Boris Pasternak’s Translations of T’itsian T’abidze,” *Comparative Literature*. Vol. 59, No. 1 (Winter, 2007), 63.
- 13) Евгений Львович Чижов. *Перевод с подстрочника*. М.: АСТ, 2013. С. 68.
- 14) Dan D. Y. Shapira, “Irān-o Tūran: On Iranian (and Quasi-Iranian) in the *Ruhnama*,” *Iran and the*

*Caucasus*, 14 (2010), 269

- 15) ダニエル・カルダー 『独裁者はこんな本を書いていた 下』 黒木章人訳, 原書房, 2019, 197
- 16) なお, 以下のサイト「インターネット新聞 Turkmenistan.ru」の記事 (2006 年 5 月 19 日) によれば, 前日首都アシガバードで開かれた「復興・統一・詩歌の日」の式典に両訳者は招かれ, 大統領のニヤゾフに完成した日本語訳書が贈呈された。大統領はトルクメニスタンの製油産業が伊藤忠商事, 日揮ホールディングスといった日本企業の関与を受けていることを述べ, 両国のパートナーシップの今後の一層の発展を希望したという。 <http://www.turkmenistan.ru/ru/node/17644> (2022 年 3 月 31 日閲覧)
- 17) IMDb の映画『聖なる本の影』(Pyhä kirjan varjo) のページ。 <https://www.imdb.com/title/tt1139618/> (2022 年 3 月 31 日閲覧)
- 18) Shapira, “Irān-o Tūran: On Iranian (and Quasi-Iranian) in the *Ruhnama*,” 269.
- 19) ダムロッシュ 『世界文学とは何か?』, 432
- 20) ほかに 2 名はイーゴリ・シュクリャレフスキー (1938-2021) とミハイル・シネーリニコフ (1946-)。
- 21) 事件の詳しい内容は以下のサイトを参照した。“Рейн, Пен и Туркменбаши” [https://www.ng.ru/ng\\_exlibris/2005-01-20/1\\_pen.html](https://www.ng.ru/ng_exlibris/2005-01-20/1_pen.html) (2022 年 3 月 30 日閲覧)
- 22) 2022 年 2 月 24 日以降, こうした指摘はさらに意義深いものになったと言えるだろう。Александр Котюсов, “Рецензия на роман Е. Чижова Перевод с подстрочника,” <https://proza.ru/2015/04/27/2234> (2022 年 3 月 31 日閲覧)
- 23) “«Россия — страна в основе своей безусловно азиатская»: писатель Евгений Чижов о чудесах, ниществе и власти поэзии,” <https://theoryandpractice.ru/posts/9697-evgeniy-chizhov> (2022 年 3 月 31 日閲覧)
- 24) Чижов. *Перевод с подстрочника*. С. 218-219.